

ご覧になった方が多いと思うが、オランダ(当時はブラバント公国)の画家ピーテル・ブリューゲルが描いた「バベルの塔」は良く知られている傑作である。私も大阪で展覧会がある時に、人込みの中で一生懸命に覗いた記憶がある。ローマのコロッセオ(円形闘技場)をモデルにしたという建物の描写は当時の建築様式が細かく正確に描かれているという。そして、働いている人々の姿が今でも動いているような感じを与えてくれる。建物の色の違いも面白い。ブリューゲルの「バベルの塔」の絵は三点あったというが、最初のもは世に知られていないよう。私たちが目にしているのは二点で、それぞれ背景や建物も違うところがある。私が好きなのはその中の先に描かれたものであるが、じっと見ていると、いろいろな物語が詰まっているようで時間の流れを忘れてしまう。何よりも画面左下のところに白い衣をまとった王様のような人物と家来たちの姿があるのはとても興味深いところである。

それは、創世記 10 章 8 節から出てくるニムロドを描写したという話がある。ニムロドは地上での最初の勇士で、彼は主の御前に勇敢な狩人であり、勇敢で力強い人を見ると、「主の御前に勇敢な狩人ニムロドのようだ」という言い方が当時であったらしい。そして、彼の王国の主な町は、バベル、ウルク、アッカドであり、それらはすべてシンアルの地にあったという。そこからシンアル地に建てられたバベルの塔のある町はニムロドの王国として考えられる。天まで届く塔のある町を建てて有名になり、一つになろうとした彼らは本当に幸せであったのだろうか。懸命に働く人々の姿は、奴隷化されている人間像を連想させる。強い指導者、強い国は力による支配を意味する。人間中心の力強さには必ず、形は違っても暴力が潜んでいるのだ。

神様が人間の言葉を混乱させ、塔の建設を中止させたというバベルの塔の話は、天に届こうとする人間の業を妨げた神様の裁きではなく、力の世界がもたらす殺し合い、必然的に自滅するしかない人間の悪を止めようとした神様の愛の業ともいえるだろう。

見える力あるもの、強い指導者を求める民衆の願望は今も変わらない。特に試練の時代にはそのような期待が強まる。しかし、その求める世界には、暴力と奴隷化の危険性があることを見逃してはならない。

コロナ禍、自然災害、戦争などの艱難の時こそ、天と地をお造りになった方、そして独り子イエスを私たちのためにこの世に送ってくださった神様にのみ、真の希望があるのではないのでしょうか。ですから今こそ、主イエスを通して示された福音を伝える足を急ぐ時ではないのでしょうか。

(鈴木善姫牧師)

